

乳児期に在宅療法、特殊保健指導を要する疾患の実態

一 その1 最近5年間の当院での 6カ月以上の長期入院例の検討一

(分担研究：新生児・乳児の在宅療法と生活管理をめぐる保健指導に関する研究)

研究協力者 西村 豊
共同研究者 鈴木 賀巳

要約：乳児期に在宅療法の対象となる疾患の実態を知る基礎的資料の一つとして、当院における最近5年間の6カ月以上の長期入院例を検討した。新生児期を入院のスタートとしたもの20例中16例(80%)に高度の医学的管理を要し、乳児期スタートのものは17例中9例(53%)であった。乳児期スタートのものに中枢神経系の予後不良の疾患が10例、59%と高率を占めた。

見出し語：乳児の在宅療法、長期入院、医学的管理

研究目的：新生児、乳児の在宅療法の対象となる疾患を把握する基礎的資料の一つとして、6カ月以上の長期入院例を検討した。

対象と方法：1985～1989年の5年間に当科に入院したNICU(広義)1430例、小児病棟4720例中、1歳未満を入院のスタートとし、通算(NICU、NICU→小児病棟、小児病棟)6カ月以上入院したものを対象とした。入院を新生児期スタートのもの、乳児期スタートのものに大別し、その疾患と、入院長期化の主原因を診療録を中心に検討を加えた。

結果：1)新生児期スタートのもの20例で、その主疾患、長期化の主原因を図1に示した。疾患別では、仮死、頭蓋内出血後遺症、先天性心疾患(主に手術例)、慢性肺障害の頻度が高か

った。呼吸管理、中心静脈栄養など高度な医学的管理を要したものが16例、80%を占めた。

2)乳児期スタートのもの17例(図2)で、何らかの中枢神経系の異常が10例(59%)と高頻度で、当面は経過観察のみで入院のものもあったが、その予後は不良であった。高度の医学的管理を要したものは9例(53%)であった。

まとめと考按：新生児期を入院のスタートとして長期化したものでは、仮死、頭蓋内出血後遺症、染色体異常を中心とする重度の奇形症候群の予後は不良であった。一方、超未熟児、極小未熟児の予後は改善され、続発する慢性肺障害や、心臓以外に奇形のない先天性心疾患の術後の予後も改善傾向にあるので、高度の医学的管理の必要性が示された。

乳児期スタートの長期入院例では、基礎疾患

が退行変性疾患を始め、中枢神経系の予後不良の疾患の占める割合が高く、経過観察が主体となる例も増えるが、最終の予後は不良例が多かった。小児病棟の長期入院では、看護面から付き添えが大きな問題となる。患児の精神面から

は家族による付き添えがよいが、長期化に伴い離婚、兄弟の登校拒否などの家庭内不和が問題となって来ている。相反する二面に対し今後の対策が急務である。

図1 新生児期(生後28日以内)をスタートとして
6ヶ月以上の長期入院を要した疾患と例数(1985~1989) 20例

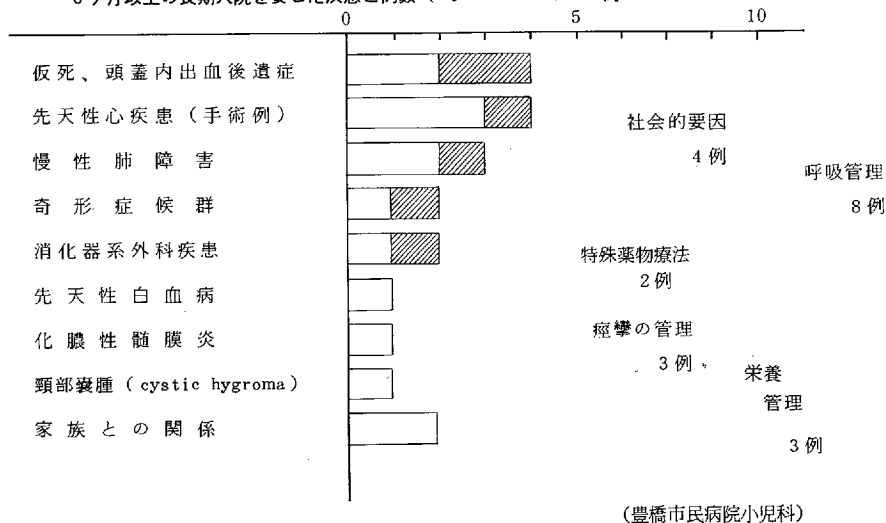
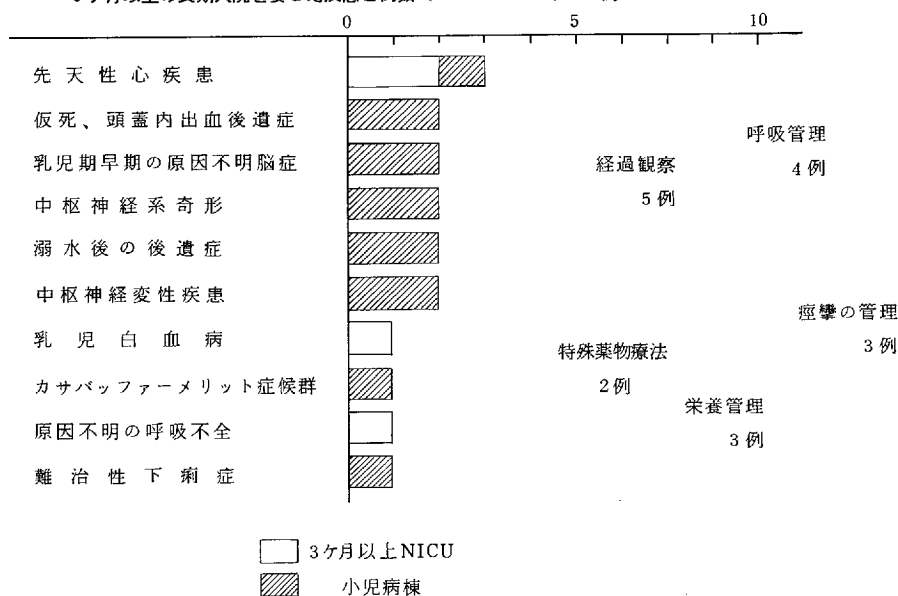


図2 乳児期をスタートとして
6ヶ月以上の長期入院を要した疾患と例数(1985~1989) 17例





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:乳児期に在宅療法の対象となる疾患の実態を知る基礎的資料の一つとして、当院における最近5年間の6ヵ月以上の長期入院例を検討した。新生児期を入院のスタートとしたもの20例中16例(80%)に高度の医学的管理を要し、乳児期スタートのものは17例中9例(53%)であった。乳児期スタートのものに中枢神経系の予後不良の疾患が10例、59%と高率を占めた。